

宮沢賢治作品における「標本」と「証拠」

米地 文夫*・三浦 修**・平塚 明*

要 旨 宮沢賢治の作品にしばしば登場する「標本」と「証拠」という語について、自然科学の立場から検討を加えた。自然愛好家であり教師でもある賢治は、「標本」を、展示用、教材用の見せる「もの」としての「標本」sample と考えていた。彼は本質的に研究者ではなく、彼の「標本」には、研究者がより重要と考える《研究の材料、研究の保証となる証拠としての「標本」specimen》は含まれていなかった。「標本」specimen を、研究者は「こと」を説明する科学的な「証拠」voucher として用いる。しかし賢治はこれらは「標本」と呼ばず、「証拠」と書いている。賢治は一種の不可知論者でもあったので、学者が挙げる「証拠」が描く世界像は、時代とともに変わると考えていたのである。

キーワード 宮沢賢治、標本、証拠、教材

はじめに

宮沢賢治の作品には「標本」という語がしばしば登場する。通常の意味での標本である場合もあるが、比喩的もしくは修辭的に用いられることもある。すでに、賢治作品のなかの「標本」に着目し、その意味を探った文学研究者としては天沢(1976)や見田(1991)があり、自然科学の研究者としては宮城(1975)や井上(1992)が、賢治自身が目にしたり、採集したりした標本そのものについて取り上げて論じている。

筆者らも、この「標本」という語が、宮沢賢治の世界を解く重要なキーワードの一つであると考え、賢治作品のなかの「標本」について、標本そのものばかりでなく、自然科学研究者の立場からその意味するものについても検討を加えることが必要と考えた。

またこの「標本」と対置する語として、賢治は「証拠」という語を用いていることがわかったので、この語についても、賢治がどのように作品の

なかで、どのように用いているか、を論ずる。

この論文は、賢治にとって「標本」と「証拠」とは何であったかを解明し、賢治の自然観、世界観を解き明かす手掛かりを得ようとしたものである。

I 「標本」と「証拠」

—賢治が使い分けた二種類の語—

I-1. ジョバンニと学者との会話

宮沢賢治が「標本」を、どういうものと考えていたかを、よく示しているのは童話「銀河鉄道の夜」のなかのプリオシン海岸の箇所である。銀河鉄道の白鳥駅での長い停車時間の間に、ジョバンニとカムパネルラはプリオシン海岸へ行き、化石の発掘現場へ行く。「三人の助手らしい人」の発掘を指揮していた大学士(最初は「学者らしい人」として登場する)に、ジョバンニが「標本にするんですか。」と聞くと、大学士は「いや、証明するに要るんだ。」と答える。『新校本 宮沢賢治全

* 岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字巣子

** 岩手大学教育学部 〒020-8550 盛岡市上田

集 10巻 校異篇』の第三稿についての校異の説明によると、当初の原稿には、賢治はいったん、「証拠」と書きかけてから、「証明する」云々と変えている。

この会話に注目した見田 (1991) は、この部分をこう要約する。

「標本にするんですか？」とジョバンニたちが聞く。「証明するに要るんだ」と学者が答える。

と書き、続けて見田は「標本とは証明である。地層の内、気層の内に発掘されるべき証明である。証明とは、過去は現在しつづけるのだ、死んだたましいは今もありつづけるのだという、賢治がそのぜんぶを賭けても求めつづけた切実な問いへの答えだ。」と述べる。

この見田には筆者らはくみしない。賢治が「銀河鉄道の夜」に書いた学者の答えは「いや、証明するに要るんだ。」である。故意かミスか「いや、」と否定した箇所を削ってしまって「標本とは証明である。」と見田は逆の形にしてしまったのである。

賢治は、学者の答えを「標本ではなく証明である」としたはずである。この本来の賢治の考えを、見田の表現をなぞって述べるならば、次のように書くべきなのである。「標本とは証明や証拠ではない。その時代ごとに、その時代の考えを証明するために地層の内、気層の内に発掘されるべき証拠とは異なる。標本とは、過去は現在しつづけるのだ、死んだたましいは今もありつづけるのだという、賢治がそのぜんぶを賭けても求めつづけた切実な問いへの答えだ。」

「銀河鉄道の夜」の原文に戻ろう。大学士は続けて語る。

「ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとち

がったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるひは風や水やがらんとした空に見えやしないかといふことなのだ。わかったかい。」

このわかりにくい説明は、賢治らしいというか、ルイス・キャロル並のナンセンスなのか、不思議な文になっている。見る立場によって地層が風や水や空に見えるというのは、いかにもおかしい。がしかし、その反面、「ぼくらとちがったやつ」がやはり地質学者であるという前提で話しているわけであるから、120万年前の地層であることの証拠に発掘中の化石（ボスとあり、一種の野牛の化石としている）が役立つという点は科学的である。

I-2. プリオシン海岸とイギリス海岸

さらにこの文の書かれた背景を探ると、「銀河鉄道の夜」のなかの「プリオシン海岸」では、

…白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたといふ風になって、半分以上掘り出されてました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

とある。この獣骨はボスという牛の先祖の化石ということになっている。

実は賢治は、この足跡の方は見つけていたが、獣骨は発見していない。実際の状況に近い随筆風の短編と考えられている「イギリス海岸」では、「第三紀偶蹄類の足跡標本を採集すべきにより」希望者は参加するよう生徒に掲示するということが書かれ、さらにイギリス海岸に行って足あとの化石を探る話になっている。

この「イギリス海岸」には作品の末尾に（一九二三、八、九。）と括弧内に日付を記している。『新校本 宮澤賢治全集 10巻 校異篇』によれ

ば、この日付について、賢治自身が後年疑問を抱き、チェックしたらしく、原稿には「翌年」と書き込みがあるという。「イギリス海岸」の文には1923年8月6日に書き始め、8日までのことを、9日に書き上げたように書かれているが、同年の7月末日から8月12日までは、賢治はサハリンへの出張をしており、日付は間違いで、翌年1924(大正13)年8月のことと考えるべきであろう。

また、「或る農学生の日記」と仮に題されている短編では、地質と土性の実習で主人公の農学生が「小船渡の北上の岸」すなわちイギリス海岸に行き、クルミの化石を拾い、「いろいろな岩石の標本を集めた。」とある。

ここで素朴な疑問が生じる。なぜ、「銀河鉄道の夜」の「プリオシン海岸」に大学士と助手とが登場し、短編「イギリス海岸」や「或る農学生の日記」のような農学校の教師や生徒が出てこないのでしょうか、という問題である。

それは、明らかに宮沢賢治が、標本と証拠とを区別しているからであると考えられる。大学士は証拠として化石を採集し、賢治や農学校の生徒達は標本として化石や岩石を採取しているのである。

宮沢賢治が発見したバタクルミの化石のことは、岩手師範学校の博物の教師鳥羽源蔵を通じて東北帝大の早坂一郎助教授に伝えられ、1925(大正14)年11月、調査に訪れた早坂が、賢治らの案内で化石を発掘し、翌年、その成果を地質学雑誌444号に発表したことは、よく知られている。

「銀河鉄道の夜」のなかの大学士は、メガネなどの風貌描写からも、この早坂一郎がモデルであることは明らかであり、研究者としての早坂の言説が投影されていることは間違いない。早坂のような研究者が化石を採取するのは、単なる「標本」ではなく、新たな見解を生み出すための証拠を得るためなのである。もちろん、普通に標本という場合は、教育用と研究用との双方があり、研究用の標本とは新たな見解を生み出すための証拠となる場合もあるはずである。しかしながら、賢治の「標本」は教育用に限定されたものとして用いて

いるのである。

早坂一郎(1975)は、当時の宮沢賢治について、「彼にとっては、地質のことはどうやらはじめての事の様だった。それは、自然愛好者としてたずねる事からよく判断された。」と述べており、具体的に賢治が訊ねたことについて、「ある地質現象が何年前位の事か、化石が何年位古いものか、地質時代の第三紀とか鮮新世とか、中新世とかいうのはどのくらい昔のことか、というのが如き事だ。」と書いている。

早坂に会う前に書かれた作品「イギリス海岸」には「或は今から五六十万年或は百万年を数えるかも知れません」と賢治は書いた。その賢治は、「銀河鉄道の夜」のなかの大学士に、クルミの化石について「ざっと百二十万年前のくるみだよ。ごく新しい方さ。」と語らせている。早坂に教わった年代によって、20~70万年、時代は古くなったのである。早坂の「彼にとっては、地質のことはどうやらはじめての事の様だった。」という表現は書き過ぎであり、賢治には彼なりの地質の観方や年代観もあった。けれども、専門家の早坂に聞いて、より詳しく、正しい情報を得ようとしたのであろう。賢治の地質学的素養は土壌理解のためのものとして学んだものであり、専門的なものではなく、地質学界の最前線のことについては殆ど知らなかったのであろう。

さらに早坂は、1975年の執筆当時のことを「最近になって、賢治は立派な地質学者だった、などとほめちぎって居る、彼の礼讃者も表れたと聞く。私は彼を一人の地質学者として礼讃する仲間にはいる気はしない。」と文を結んでいる。

早坂の原文を抜き書きしたために誤解される恐れがあるので付記すると、早坂一郎は宮沢賢治が化石の第一発見者であることを高く評価し、謝意を表しているとともに、文筆家としての彼の名声が高くなったことを喜んでおり、賢治に対する早坂の好感が文章から感じられる。

早坂一郎は、文学者で熱心な自然愛好家である賢治を評価しつつも、賢治を「立派な地質学者」とまでいう礼讃者の鼻根の引きだおしの言辭を

批判しているのである。

この早坂の文を読むと、「銀河鉄道の夜」の「プリオシン海岸」における大学士の答えの意味がより鮮明になってくる。すなわち、自然愛好家であり教師でもある賢治は、化石を「標本」として採取し、学校に納めて教材として活用することのみを考えていたのに対し、早坂はその化石が地質学的「証拠」になることを賢治に教えたのであった。その早坂の教示が、賢治にとっては新鮮な驚きであり、作品において大学士の発言として示されることになったのである。

I-3. ブルカニロ博士の地理と歴史

「証拠」という語は、「銀河鉄道の夜」の初期原稿の一つ（『新校本 宮澤賢治全集 10巻 校異篇』にいう第三稿）には、もう一度でてくる。この初期原稿に登場し、次の原稿（現存する最終原稿）では削除されているブルカニロ博士の述べる話の中である。博士は、銀河鉄道の旅の終わりに、ジョバンニにこういう。

「…ちょっとこの本をごらん、いゝかい、これは地理と歴史の辞典だよ。この本のこの頁はね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。よくごらん紀元前二千二百年のことでないよ。紀元前二千二百年のころにみんなが考へてゐた地理と歴史といふものが書いてある。だからこの頁一つが一冊の地歴の本にあたるんだ。いゝかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年のころにはたいてい本統だ。さがすと証拠もぞくぞく出てゐる。けれどもそれが少しどうかなと斯う考へだしてごらん。そら、それは次の頁だよ。紀元前一千年 だ いふ、地理も歴史も変つてゐるだらう。このときには斯うなのだ。…」

ブルカニロ博士が言うには、地理も歴史も我々がそう感じているだけで、それは明滅するようになり、最後は「がらんとしたたゞもうそれっき

りになってしまふ」らしいのである。

このブルカニロ博士もまた、「証拠」という言葉を用いている。

しかし、過去のある時点で「証拠」が「ぞくぞく出て」いて本当のことと思われたことが、次の時代には否定されて別な地歴が書かれるということらしい。科学の進歩を示すともいえるが、宮澤賢治の、科学を超えた宗教的な世界観とも結びつくものであろう。

そのことは宮澤賢治が一種の不可知論者でもあることを示し、地質学者が「証拠」をもとに議論して描く世界像を超えた立場をとっていることを示していよう。その意味においても、賢治は地質学者ではないのである。

I-4. 火山弾とハマナス

このような「標本」と「証拠」との関係についての宮澤賢治の考え方は、童話「茨海小学校」にもみられる。

書き出しの部分はこう書かれている。

私が茨海の野原に行ったのは、火山弾の手頃な標本を採るためと、それから、あすこに野生の浜茄が生えてゐるといふ噂を、確かめるためとでした。

火山弾を「標本」として採取したいこと、野生の浜茄（ハマナス）が生えているという噂が真実か否か確かめる、すなわち「証拠」を探すこと、の二つが目的だということである。

そのあとに、海岸に生える浜茄（ハマナス）が、海から遠いその野原に生えるのはおかしいと皆がいうと書き、それに対する「ある人」の議論を紹介する、という展開になる。

ある人は、新聞に三つの理由をあげて、あの茨海の野原は、すぐ先頃まで海だったといふことを論じました。それは第一に、その茨海といふ名前、第二に浜茄の生えてゐること、第三にあすこの土を嘗めてみると、

たしかに少し鹹いやうな気がする、とかう云ふのですけれども、私はそんなことはどれも証拠にならないと思ひます。

ところが私は、浜茄をたうたう見附けませんでした。尤も私が見附けなかったからと云って、浜茄があすこにないといふわけには行きません。もし反対に一本でも私に見当たったら、それはあるといふことの証拠にはなりません。ですからやっぱりわからないのです。

「私」は火山弾を一つ採ったあと、キツネの小学校に迷い込み、参観させられ？たあと、校長に火山弾を見せるはめになり、校長に「実にいゝ標本です。いかゞです。一つ学校へご寄付を願へませんでせうか。」と言われて、仕方なく寄付させられるという話である。

この場合、火山弾は「標本」としてのものであり、「私」がそれを採っても、その火山弾を寄付させたキツネ校長がそれを戸棚にしまったとき、「私」とは完全に縁が切れたのである。その戸棚には「いろいろのわなの標本」も入っていると前の方で書かれている校長室の戸棚である。「何かから何まですべて狐の初等教育に必要なくらゐのものはみんな備えへつけられて」いるとも記されていた。授業の中でそのわなの5つ全部が教室に持ち込まれて、教材にするのである。火山弾も教材になるという設定なのであった。

それに対して、ハマナスをもし「私」がそれを見つけたならば、ハマナスというものの問題ではなく、ハマナスがあるということの「証拠」になるのである。ただし、その「証拠」は得られないままになった、という話になる。最初の部分で紹介した形をとる茨海がかつて海であったかどうかは、たとえハマナスが見つかって、その「証拠」にはならないと「私」は思う訳であり、「証拠」ということにこだわった作品なのである。

I-5. 孔のあいた貝と孔石

未完の童話「サガレンと八月」は、前半が「私」が風とかわす会話、後半が風が話してくれたタネ

りの話で、未完のままである。この作品は、「標本」についての賢治の観方の根源に触れた部分を含んでいる。

風は作品の冒頭で、「何の用でこゝへ来たの、何かしらべに来たの、何かしらべに来たの。」と「私」に聞く。

「おれは内地の農林学校の助手だよ、だから標本を集めに来たんだい。」と答えるが、風はなおも「何の用でこゝへ来たの、何かしらべに来たの、しらべに来たの、何かしらべに来たの。」と聞く。「私」が黙っているとさらに、「何してるの、何を考へてるの、何か見ているの、何かしらべに来たの。」と聞く。

「私」は白い貝殻に円い小さな孔があいているのを拾い、いゝ標本がとれたと思う。しかし、波が「貝殻なんぞ何にするんだ。そんな小さな貝殻なんぞ何にするんだ。何にするんだ。」と聞く。で、「私」はむっとして「あんまり訳がわからないな、ものと云ふものはそんなに何でもかでも何かにしなけあいけないもんじゃないんだよ。」云々と答える。それに対し波は「おれはまた、おまへたちならきつと何かにしなけあ済まないものと思ってたんだ。」と申し訳けを言うが、「私」はどきとし、顔を赤くし、居ても立ってもいられないような気持ちになったのである。

先の風の問いかけは、何か調べにきたのか、言い換えれば、「証拠」（標本という「もの」ではなく、証明する「こと」を目的とする）を調べに来たのかという質問である。ここでも賢治は、そうではなく標本、つまり「もの」を集めに来た、と答えている。

次の波との問答は、貝殻を何にするのか、という問いに、何にもしない、つまりそのまま標本にする、ということ、を、「ものと云ふものはそんなに何でもかでも何かにしなけあいけないもんじゃないんだ」という言い方で答える。波が人間たちはものを何かに変えるのが常だから、そう思ったのだ、と弁解する。

その答えが「私」を恥ずかしい思いにさせるのである。

なぜだろう。二つの解釈が成り立つ。一つは人間が自然のものをいつも改変していることの不当さを指摘されたからという解釈であり、他の一つは「私」が標本などという何にも変えない、つまり役に立たないものを集めに来たことの恥ずかしさを感じたからという解釈である。後者は「もの」を「証拠という“こと”」に変えることへの躊躇ともいえる。

「サガレンと八月」の後半は、孔石を探しに行くタネリ（孔のあいた貝を標本にしようとする「私」と共通する設定）が、母親の注意も聞かずにクラゲを日にすかして見たために災難に逢うという話である。「もの」を集めるだけならいいが、「もの」を使って「こと」を行ってはいけない、という寓意とも解される。

もともと、このサガレン（旧樺太、現サハリン）への旅行は、1923（大正12）年夏、農学校生徒の就職依頼のためであった。この旅行はまた、前年亡くなった妹トシの鎮魂の旅でもあったことはよく知られている。ところが、旅の目的はさらにもう一つ、標本の収集があったのである。「サガレンと八月」の「私」と同じく、賢治も標本を集めてきたことは、詩「鈴谷平原」に「こんやはもう標本をいつばいもつて／わたくしは宗谷海峡をわたる」とあることからわかる。

ここで、奇異に思われるのは、孔のあいた貝を標本にしようとする「私」と、タネリが孔石を探していること、とに共通する孔の意味である。秋枝（1996）は、「孔石、穴石」に対する信仰が日本の民間信仰にかなり広く浸透しているのではないかと述べ、盛岡の夕顔瀬橋たもと付近の祠に穴石が奉納されていることを例として挙げている。

穴のあいた石を貴んだ例としては、平泉毛越寺の浄土庭園の石組に三陸海岸から運ばれたと思われる穴のあいた岩があることからわかる。

『春と修羅』のなかの詩「鈴谷平原」の「標本をいつばいもつて」とある、賢治がサハリンで採集した標本にはどんなものが含まれていたであろうか。作品からはその内容が不明である。萩原

（2000）は、『詩「樺太鉄道」に「松脂岩薄片」とあるので、コハクを拾ったことがわかる』と述べ、『栄浜海岸で琥珀を拾ったり、岩石標本を蒐めたり』したと考えている。

自身のサハリン紀行時の栄浜における琥珀などの採集の体験に基づいた推定で興味深いのが、賢治の行動が萩原のそれと同一であったという保証はない。特に萩原が『「松脂岩薄片」つまり針葉樹の松脂でできた琥珀』としているのは間違いであろう。松脂岩は琥珀とは無縁の岩石で、溶結凝灰岩の一種である。特にガラス質が多いのが特徴で、緑～黒みがかって樹脂状の光沢をもち、愛知県の鳳来寺山などが主な産地である。

また岩石の薄片とは、岩石を研磨して光を透かすほど薄くして、偏光顕微鏡で観察するためのものをいい、詩「樺太鉄道」にある「松脂岩薄片のけむりがただよび」というのは顕微鏡下の松脂岩薄片のような色の煙（か雲霧の類か）を形容するために、記憶の中から取り出して用いたのであり、サハリンで採取した標本そのものを詠ったわけではない。

したがって、賢治がどのような標本を持って帰ったかは、依然、不明である。この場合の「標本をいつばいもつて」が、例えば同じ『春と修羅』のなかの詩「芝生」にでてくる「光の標本」のような抽象的なものである可能性も考えられる。しかしながら、賢治はこの年あたりから、鳥羽源蔵との交流があったと考えられるので、作中の「私」と同様、鳥羽がそのころ最も研究の重点を置いていた貝類への関心が高まり、貝の標本を集めた可能性が高い。なお、鳥羽源蔵と賢治との関係については、源蔵の孫に当たる鳥羽彊の文（2003）などがあり、1923（大正12）年の鳥羽源蔵の手帳に賢治の名があることなどを紹介しており、興味深い。賢治と鳥羽との関係の詳細については、この鳥羽彊の記述や澤口（1997）などにゆずりたい。

Ⅱ 「教材」としての「標本」

－賢治にとっての「標本」－

Ⅱ－1. 「いい標本」とは何か

宮沢賢治にとって「標本」は sample であり、教材であり、評価の定まったものであった。しかし、本来「標本」は specimen でもあり、いわゆる博物標本は、研究の示準であったり、素材となったりするものでもある。しかし、宮沢賢治の念頭には教育のための「標本」はあったが、研究のための「標本」はなかったと思われる。したがって研究のための標本にあたるものは、彼にとっては「証拠」 voucher という語で表現されるのである。

賢治は、盛岡高等農林学校の出身である。日本初の高等農林学校として優れた教育を行い、幾多の人材を育てたが、その主目的は実学としての農学の振興を担う農業技術者の養成であった。したがって大学の農学部のような、研究の後継者の養成を予期した体制ではなかった。したがって、標本も教材としての意義をもつ sample がほとんどで、大学の研究室におけるもののような研究の素材や示準となったりする標本 specimen ではなかったのである。

この種の specimen 的な標本の意義を示すものとして、「証拠」という語が特別な意味をもって賢治作品に登場するようになったのは、大正14年の早坂助教授の調査の案内をしたのちである。Iで取り上げた「銀河鉄道の夜」は、その体験以降の作品と考えられる。また、おそらく大正12年ころ以降大正14年までは、鳥羽源蔵との出会いがあり、「標本」についての考えにやや幅が生じたともみられる。そこで、「標本」はそれ以前の作品にも登場するが、その場合はどのように描かれているのかをみてみよう。

「気のいい火山弾」は大正10年頃の作品と考えられている。確証はないが、主人公の火山弾の送り先が「東京帝国大学校地質学教室」であることも、少なくとも早坂来訪以前であることを窺わせる。鳥羽は化石など地質学的な標本については東

北帝国大学の矢部長克や早坂一郎に標本を送るなどして教示を受けているので、鳥羽に会ったのちならば「東北帝国大学校地質学教室」になりそうであり、後年の「ポラーノの広場」の主人公は、セnderドの理科大学の標本を見せてもらいにゆく、すなわち矢部や早坂の居た東北帝大を訪れる話を造っているからである。

この「気のいい火山弾」の主人公である「ベゴ」というあだ名の黒い石（火山弾）は、まわりの石や植物から悪口をいわれていたが、ある時、学者たちに見いだされて、大学へ標本として送られるという話である。

その見いだされた場面はこうである。

その時、向ふから、眼がねをかけた、せい高い立派な四人の人たちが、いろいろなピカピカする器械をもって、野原をよこぎって来ました。その中の一人が、ふとベゴ石を見て云ひました。

「あ、あった、あった。すてきだ。実にいい、標本だね。火山弾の典型だ。こんなととのったのは、はじめて見たぜ。あの帯のきちんとしてることね。もうこれだけでも今度の旅行は沢山だよ。」

「うん。実によくととのってるね。こんな立派な火山弾は、大英博物館にだってないぜ。」

みんなは器械を草の上に置いて、ベゴ石をまはってさすったりなでたりしました。「どこの標本でも、この帯の完全なのはないよ。どうだい。空でぐるぐるやった時の工合が、実によくわかるじゃないか。すてき、すてき、今日すぐ持って行こう。」

みんなは、又、向ふの方へ行きました。

その昼過ぎにさっきの四人と村人と荷馬車が来て、「さあ、大切な標本だから、こはさないやうにして呉れ給へ。よく包んで呉れ給へ。苔なんかむしってしまはう。」という指示通りにされて、ベゴ石は運ばれてゆくのである。

苔にまで馬鹿にされていたベゴ石が、一転して褒め言葉を浴びせられ、大学へ運ばれるというストーリーとして、一見、自然な描写にみえるが、よく考えると宮沢賢治が略したか、気が付かなかったか、したことがある。それは標本を採取した時に最低限、いつ、どこで、どのような状態にあったものを、標本として採取したか、の記録をとるという場面が抜けていることである。

その次に、この火山弾の学問的な意義についてはほとんど触れずに、立派、すてき、ととのっている、などという見かけの良さ、つまり展示したときの見栄えが褒められ、大英博物館にもないなどと博物館の名はでるが、他の学者の研究論文などにあつたとか、なかったとか、いう論議はない。

そして「実にいゝ標本だね。」と、「茨海小学校」の狐校長と同じような賛辞を呈しているのである。つまり、大学の学者たちという設定ではあるが、彼らは火山弾に研究の資料としてではなく、展示物としての価値を見つけ、そこにこのような火山弾があつたということには全く意味を認めず、実にいい標本を見つけ、そのものを大学に送ることで旅行の目的は果たした、とのみ言っているのである。

ただし、「茨海小学校」の標本となつた火山弾は、「私」にいわせると小さくて、ごく不完全であるが、ベゴ石は大きくて完全なものとして設定されている。小学校用と東京帝国大学校との違いはそういうところにあるだけで、どちらも教材であることには違いはないのである。

「いゝ標本」が出てくる作品に1922(大正11)年ころの短編「台川」がある。主人公ら農学校の生徒たちが台川に地質の実習(希望者による授業の枠外のもの)にゆく話で、教師は壺穴(ポットホール、甌穴)の説明をする。そして生徒の一人がポットホールの「いゝ標本」を見つける。

「ほこの穴こまん円けぢや。先生。」

あゝいゝ、これはいゝ標本だ。こいつなら持って来いだ。

〔さあ、見て下さい。これはいゝ標本です。

そら。この中に石ころが入ってませう。みんな円くなつてるでせう。水ががりがり擦つたんです。そら。〕

実にいゝ、磔だ。まっ白だ。まん丸だ水でぬれてゐる。取つてしまった。誰かゞ又搔き廻す。もうない。あとは茶色だし少し角もある。あゝいゝな。こんなありがたい。

主人公の生徒は、ポットホールの中の丸い石を手に入れて《あゝいゝな。こんなありがたい。》と思っている。まん丸で白い「いゝ標本」なのだが、どんなにきれいでも中の石だけ持つて帰つては、教材として「いゝ標本」なのかどうか、ポットホール自体抜きで中の石だけでは、見た者が理解できるかどうか疑問が残る。色や形の美しさだけで「いゝ標本」なのであろうか。ただし、この短編「台川」のなかに「…壺穴の標本を見せるつもりだったが思ったくらゐははっきりはしてゐないな。多少失望だ。」という箇所がある。文脈からは主人公の生徒の思ったことが書いてあるのだが、見せたいと考えたのは教師で、その教師の気持ちに代弁しているらしい。ここではポットホール全体が標本なのだが、「はっきり」していないので失望する。はっきりした典型的なポットホールがいい標本と考えているのである。しかし、生徒はその中の丸い石のみを取り出して、ありがたい「いゝ標本」というのであつた

短編「台川」には、玻璃蛋白石の岩脈を教師が「いゝ標本です」という場面もある。「取らへないがべか」「いゝや、此処このまんまの標本だ」という生徒と教師の会話があつて、結局、主人公の生徒がハンマーで取る。教師はその「標本」の説明をして、〔持つておいでなさい〕と言う。

どうやら、丸い石も玻璃蛋白石の岩脈も、学校に置く「標本」ではなく、採取した生徒が持ち帰つてもよいということらしい。

短編「台川」は子安(1996)が「まさしくこの地質学的な視線、あるいは岩石標本的な視線によって構成されている作品」と評した。「この地質学的な視線」とは子安によれば「現代目の当たり

にする岩石をはるかな過去の地球の運動の痕跡として見出す」視線で、ヨーロッパにおいて19世紀半ばに成立したという。

子安（1996）は「岩石標本」は、「土神ときつね」に出てくる望遠鏡とともに、「〈北上〉の地のはるかな夜空と地底とに向けられた視線のモダニズムを支えるたからものというべき小道具である。それらは同時に賢治のファンタジーの世界を可能にする小道具でもある。」という。この「たからもの」という語には傍点がつけられている。賢治は美しい「たからもの」を求め、それを「この地質学的な視線」で見る（見るのであり、調べるのではない！）ことにより、ファンタジーの世界を拓き得たのである。

「い、標本」を採る実習は、生徒たちにコレクターとしての喜びを与えるものとして描かれる。「石っこ賢さん」の拡大再生産的教育である。

鳥羽や早坂に出会うまでの宮沢賢治は、火山弾や化石などに学者が見いだす「証拠」としての価値をほとんど知らなかったか、軽視していたのであろう。また、鳥羽や早坂に会ったのちでも、基本的には彼は彼のいう「標本」の方に強い関心を持ち続けたのである。

II-2. 「標本」を採集する賢治たち

初期の短編「泉ある家」には、富沢という賢治とおぼしき人物が登場する。彼は斉田という仲間と一緒に土性調査のために、青金鉱山の近くに来ているという設定である。青金は赤金のことで、種山高原に近い。

これが今日のおしまひだらうと云ひながら
斉田は青じろい薄明の流れはじめた県道に立
って崖に露出した石英斑岩から一かけの標本
をとって新聞紙に包んだ。

富沢は地図のその点に橙を塗って番号を書きながら読んだ。斉田はそれを包みの上書きつけて背囊に入れた。二人は早く重い岩石の袋をおろしたさにあとはだまって県道を北へ下った。

この文は、賢治たちがどのように標本を採集したかが解って興味深い。そのあと宿に着いた二人はその標本などの整理をする。

二人は（中略）今日の仕事の整理をはじめた。富沢は色鉛筆で地図を彩り直したり、手帳へ書き込んだりした。斉田は岩石の標本番号をあらためて包み直したりレッテルを張ったりした。

今もほぼ同じように岩石の標本を採集し、記録し、整理しており、専門的にみても、内容としては特に問題はなさそうに見える。しかしながら、どこか物足りない。二人は疲れているらしいが、それにしても採集も整理もごく機械的である。採集した地点については地図に番号を書き込むだけ、整理の段階でも二人の間の会話はなく、ばらばらに仕事をする。創作であるから、実際と異なっていたり、読者に関心のなさそうなことは省いたりしているのだろうが、仲の悪くなさそうな二人の作業が淡々と語られている。

富沢たちは、岩石の標本を採集し、その場所を地図に記録することで、ほとんど終わっている。二人の間には、岩石の時代の推定や、露頭の状態の説明などの討論はなく、地質構造のなかの位置づけ、などについても顧慮していないようにみえる。

宮城（1975）は、この作品の富沢は宮沢賢治、斉田は神野助教授であることはいうまでもない、と述べているが、作品の中に二人をみた老人が、まだまるでの子供だ、と感想を持つというくだりがあるので、神野助教授という設定ではないかも知れない。

宮沢賢治が採集したとされる標本については宮城（1975）や井上（1992）の著書に詳しく書かれているので、ここでは触れないが、岩石に直接ラベルが貼ってあり、岩石名や採集地および番号が簡略に付されているものが多いようである。

のちの未完の作品「或る農学生の日誌」（と仮

の題が付けられている)には、賢治の教え子とおぼしき農学生が、「ぼくは土性の調査よりも地質の方が面白い。土性の方ならたゞ土をしらべてその場所を地図の上にその色で取って行くだけなのだが地質の方は考へなければならぬしその考がなかなかうまくあたるのだから」と書いたことになっている。

この農学生の感想としたものは、実は賢治自身の気持ちを示しているとみられる。かつて賢治は土性調査を行い、母材の岩石の採集も行った。その際には、「泉ある家」のなかの二人のように、標本を採ってその場所を地図に記録するのが主であったらしい。しかし、地質調査の面白さを賢治が本当に知ったのは、花巻農学校時代に早坂助教授に会って際であると考えられる。

すなわち、「標本」の単なる採集から、「考える」調査へと、賢治の関心は変わったのである。だが、その後の賢治には地質調査に本格的に携わる機会も時間ももうなかった。農学校教師から転じ、農民教育や石灰岩粉末のセールスなどに、彼は早すぎる晩年を使うのであった。

II-3. 「標本室」と「標本」

学校教材の標本は、標本室とか理科室(昔は博物室が多かった)などの名の部屋に収納されることが多かった。「茨海小学校」の標本は校長室の戸棚に入っていることになっているが、これは校長に取り上げられるという設定のために校長室に置くことが必要だったのであろう。

「標本室」に触れている作品の一つは「銀河鉄道の夜」である。主人公ジョバンニが父親について、こう話す。

「…この前お父さんが持ってきて学校に寄贈した大きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持って行くよ。」

教材を収納する典型的な標本室が思い出され

る。

「或る農学生の日誌」には、北海道修学旅行で小樽の高等商業の標本室を見てきたというくだりがある。「馬鈴薯からできるもの百五六十種の標本が面白かった。」とあるのは、実際の「修学旅行復命書」に賢治が「商品標本室にては…」と書いてあるなかに「参考となるべきもの多く殊に独乙の馬鈴薯を原料とせる三十余種の商品標本」等について「注意せしむ。」とあることと対応するものの、細部が異なる点は、現実とフィクションの違いがわかり、興味深い。

「毒蛾」の場合は、コワック大学校という架空の学校を視察する話である。

大学校は、やっぱり大学校で、教授たちも、巡回視学官の私などが行ったからと云って、あんまり緊張をするわけでもなし、少し失敬ではありましたが、まあ私はがまんをしました。(中略)…一つの標本室へ入って行きましたら、三人の教師たちが、一つの顕微鏡を囲んで、しきりにかはるがはるのぞいたり色素をデックグラスに注いだりしてゐました。

コワック大学校とは花巻農学校のあだ名「クワッコ大学」をもじったものであるが、大学校という設定にしたので標本室も多数あるらしく、顕微鏡を用いて毒蛾の鱗粉を調べる、という実験もできる設備であることになっている。ここでは賢治は鱗粉の中管の酸が毒の正体であることを証明して、巡回視学官(モデルは文部省督学官、米地、1966)を感服させるのである。

つまり、小学校レベルでは標本室は教材の保管室的役割であるが、高等教育機関では参観者のための展示室であったり、一部の実験はできる場所になっている、という書き分けを賢治は行っているのである。

「毒蛾」のコワック大学校での毒蛾の検鏡の場面は、鱗粉という標本を観るのであり、しかも鱗粉に刺されるといふ現象の仕組みを確かめるためのものである。鱗粉の中軸の管に酸があり、その

先端が皮膚にささって、折れたとき酸が注ぎ込まれるという、一人の教師の表現でいうと「模型的」なメカニズムであることを検証しようとしたものであった。

鱗粉の作用が「模型的」なものであることを確認するというのは、研究的創造的なレベルの実験とはいえない。この標本室の一角でのできごとは、標本の毒蛾を観ている教師たちを視学官が観ている、という入れ子になっており、なおかつ「標本」とは見せるもの、という賢治の標本観から大きく離れてはいない。

標本室という名前は出て来ないが、前述の「気のいい火山弾」の行き先は東京帝国大学校地質学教室の標本室であろう。そこは火山山麓のような「明るい楽しいところ」ではないと、当の火山弾が言う。暗く楽しくない所なのである。平岡(1988)がいうように「そこは、雨も降らず、日も照らず、月や星のあかりすらなく、霧のかかることも永遠にない世界」で、火山弾は「グスコブドリの伝記」の主人公と同じく、「行って帰ることのない〈死〉の異空間にいる」、のである。

生死を超えて「もの」が存在し続けるところ、それが標本室である。

なお、生きた標本を展示する場としては植物園などがあるが、賢治の植物園との関わりについては、三浦・米地(1999)の報文があるので省略する。

Ⅲ 博物館と標本

Ⅲ-1. 質屋と博物館員

「石っこ賢さん」と呼ばれたというほど、賢治は少年時代、石ころなどを熱心に集めた。男の子にはしばしば見られる収集癖は、賢治の場合は大人になっても続いた。田中(2003)は「宮沢賢治にはマニアックなところがあり、それがいろいろな収集癖としてあらわれている」というが、むしろ賢治の少年時代からの収集癖が、性格のマニアックなところと結び付いたというべきであろう。田中(2003)の指摘で注目される点は、賢治がも

のへの執着心はまったくなかった、と述べていることである。集めたものを人にあげたり、売ったりして残さなかった、とも記している。

筆者らは、「もの」への執着心のなさは宮沢賢治が質屋(もとは古着屋)の長男であったことと無縁ではないと考えている。質屋には多くの物品が預けられるが、元の持ち主に戻ったり、質流れでよそへ行ったりする。

「標本」も採集者個人の手を離れて、学校や博物館に収められる。その点では、「もの」への個人的執着心とはほとんど無縁のものといえるだろう。質草の物品とは異なり、「標本」は博物館などに保存される。しかし質草が質屋によって評価されるのと同様、標本も博物館員などによって評価され、その価値を認められて保管、展示される。

賢治の、「標本」には不変の価値があり、「証拠」は不確かなもの、という認識も、彼が質屋の子であったことと関わっているのではないだろうか。質屋にとっては、客の持ち込む質草の「もの」こそすべてであり、客に関する保証的なことがらは不確かなのである。言い換えれば質草は「標本」であり、客の事情や信用度などを示す何か「証拠」があっても、それは当てにならないのである。質流れになっても、「もの」さえしっかりしたものであれば、大丈夫なのである。

宮沢賢治にとって、「証拠」に重きをおく早坂のような学者の存在は、物語の中に登場させたいほど魅力のあるものであった。だが、賢治自身がそのような学者、研究者になりたいと思っていたかどうかは疑問である。賢治はむしろ、「標本」の収集、展示に当たる博物館員が、彼の理想に近い職業だったと思われる。

Ⅲ-2. 博物館員キュースト

博物館などの施設に勤める職員となることが宮沢賢治の夢の一つであったことは、童話「ポラーノの広場」などに登場するレオーノ・キューストの描き方からわかる。

長編「ポラーノの広場」の冒頭で彼はこう語る。

そのころわたくしはモリーオ市の博物館に勤めて居りました。

十八等官でしたから役所のなかでも、ずうっと下の方でしたし俸給もほんのわずかでしたが、受持ちが標本の採集や整理で生れ付き好きなことでしたから、わたくしは毎日ずいぶん愉快にはたりました。

しばしば「グスコブドリの伝記」が宮沢賢治の「ありうべかりし伝記」であると言われるが、実際の賢治の性格や言動からみると、むしろ「ポラーノの広場」こそ「ありうべかりし伝記」であり、主人公のレオーノ・キューストは賢治の分身ともいべきキャラクターに描かれている。そのキューストが、標本の採集や整理は「生れ付き好きなことでした」と言うのは、まさに宮沢賢治自身の言葉であったと思われる。

キューストのある年の7月の仕事は次の四つとなっている。

北極熊剥製方をテラキ標本製作所に紹介の件、ヤークシャ山頂火山弾運搬費用見積の件、植物標本褪色調査の件、新番号札二千三百枚調製の件。

標本に直接関わるもの3件と、おそらくは標本につける番号札の件とである。またイーハトヴの地元の火山弾と、他地方の北極熊剥製とがあり、キューストの勤める博物館が地元の標本のほかに、啓蒙のための他地方の標本をも集めていることがわかる。

賢治にとっては、じっくりと一つのフィールドを研究することよりも、いい標本、立派な標本を求めて広く歩き回るの方が、魅力的だったようである。

賢治の「ありうべかりし」肩書は、博物館員だったのである。

Ⅲ-3. 現代の博物館と標本

現代の自然史博物館においては、標本は、賢治の考えたような、いい標本、立派な標本という範疇にとどまらない。松浦(2003)は標本について基本的な役割を述べた文に、「博物館の展示や教

育・普及活動に使用される標本もあるが、ここでは自然史研究に用いる標本の役割について述べる」、として標本の役割は研究材料であるとする。さらに松浦(2003)は、次のように言う。

「自然史研究に用いる標本」に限定すると標本の役割は自明であって、研究材料ということになる。しかし、「自然史研究に用いる標本」は単に研究材料になるだけではない。標本には研究結果を保証するという役割、つまり「証拠 voucher」という重要な役割がある(Pietsch and Anderson,1997)。

横山ら(2003)も、岩石標本についてその採集について述べる際に、「一般的な研究用の標本」と「溶岩樹や火山弾などの特殊な形態を持つものや展示のために採集する標本」とに分けて説明している。

賢治にとって「標本」は展示や教育・普及活動に用いるものであったが、現代の自然史博物館の「標本」は研究結果を保証する「証拠」という重要な役割をもつものが中心となり、彼が夢見た博物館員像とはかけ離れてしまっている。

Ⅳ 標本と商品見本

Ⅳ-1. 博覧会と標本

賢治晩年の孔雀印手帳に書き留められた詩の一つは、こう始まる。

朝は北海道の拓殖博覧会へ送るとて／標本あ
またたづさえ来り

それが硬度のセメントに均しく／色彩宇内に
冠たりなど

或はこれがひろがり／大連蠣殻の移入を防
遏すべき点／殊に審査を乞ふなどと

や、心にもなきこと書いて／県庁を立ち出で
たりけるに(後略)

この詩が書き付けられたのは、1931(昭和6)

年6月18日の後間もなくのことである。なぜならば、当日付けの鈴木東蔵宛て書簡に「今朝商工課に参り北海道出品打合致し候」と始まり、会場の場所が狭いので、送る「建築材料の原品及び製品の額面一枚及標本瓶」の大きさなどを細かく指示され、30日までに県庁に持参するよう言われたことが書いてある。さらに、それらを賢治宛てに送って欲しいと依頼している。したがって同年6月下旬のことを詠んでいる。

鈴木は東北採石工場の場長で、賢治はこの工場の技師を名乗るが実質はセールスを引き受けていた。主力製品として賢治が売ったのは肥料搗粉（石灰岩粉末）で、博覧会へも標本瓶に3～5種入れて出品した。また建築材料とは石灰岩などの粉末を固めりした人造石であるらしい。なお、同年7月30日付けの鈴木宛ての賢治の書簡に、「壁標本及セメントへ粉を加えたる標本」計36種の洗い出しや研ぎ出しを行っている旨の記述がある。

地味な肥料の売り込みばかりでなく、美しい大理石様の建築材料を売ることに、賢治が力を入れていたことは、それらを「色彩宇内に冠たり」などと詩にも書いていることから読み取れる。

IV-2. 商品見本と教材としての標本・資料

前節でいう「標本」は、博覧会へ出品する標本ではあったが、それは同時に商品見本でもあった。

標本と商品見本との関係を示していて興味深いのは、1931（昭和6）年8月13日付け鈴木宛て書簡である。賢治は鈴木から依頼されていた「標本」は仕上がったという。これは前記の壁標本の洗い出し、研ぎ出しの完了をいうらしい。

賢治はそれとは別に石灰岩粉末製作の母岩2種を「商品見本として」盛岡高等農林学校農芸化学教室の小野寺博士宛てに送るよう鈴木に依頼している。そして、その後に「多分右は講義用としたる后標本室に陳列するものと存候」と書いている。また賢治からは小野寺博士に養鶏用と肥料用の搗き粉は渡すことも付記している。

すなわち、ここでは標本とは即、商品見本であり、むしろ商品見本の標本というべきものらしい。

賢治の見込みでは、おそらく標本室にも商品見本標本として陳列されるものとなっていたのである。

なお、賢治が、小野寺伊勢之助教授に対して、同年、搗き粉一俵を寄贈して生徒の卒業論文の実験用の資料とするよう依頼したことが、のち、1933（昭和8）年5月1日の鈴木宛て書簡にみられる。賢治は彼自身その実験の成果を鶴首して待っている旨も書いている。

この場合は搗き粉を「資料」と呼んでいる。

賢治の用例では、実験の材料は「資料」であって「標本」ではない。それに対して講義用の教材は「標本」であり、「標本室」に保管されるべきものなのである。

賢治にとって「標本」はあくまでも見せるためのものであり、見られるためには美しく、整った、完全なものが望ましいのであった。

IV-3. 商品としての宝石

賢治にとり、見せるための美しく、整った、完全なもの、最高のもの、とは宝石であったと思われる。

「榎ノ木大学士は宝石学の専門家だ」と始まる賢治の童話「榎ノ木大学士の野宿」は、商会から頼まれて上質の蛋白石を探しに出掛ける大学士の話で、金子（1974）がいうように宮沢賢治の分身なのである。宮沢賢治の夢見た仕事の一つは宝石や貴石の採集や加工の仕事であった。

地質や岩石の話にあふれるこの作品には、実は「標本」の語がでてこない。なぜならば、大学士は注文主の依頼した商品そのものを採集に出掛けるからである。それは教材用でも展示用でもなく、商品見本でもない。賢治の考える意味での「標本」ではないからである。

宮城（1983）は、この作品を詳しく紹介している。作品の最後に近い部分で、賢治が「大学士はごく無雑作に／背囊をあけて逆さにした。／下等な玻璃蛋白石が／三十あまりころげだす。」と書いた部分を、宮城は「背囊から出てくる標本」と説明している。地質学者である宮城にとっては、

採集してきたものは「標本」なのであるが、賢治にとっては商品（に結局はならなかったのだが）であって「標本」ではないのである。

楯ノ木大学士の採集した玻璃蛋白石は、プリオシン海岸の大学士の獣骨化石とは、また違った意味で、賢治にとっては「標本」ではないのであった。

V 賢治作品における「標本」の景観への適用例

V-1. 典型的な「標本」としての「半蔭地」

賢治作品には「風景」という用語が多用されているが、「景観」の用例はごく少ない。しかしながら「風景観察官」という詩の題にみられるように、彼は風景を科学的に観察するという立場をとっていたと思われる。したがって賢治の「風景」は、一般的な意味での「風景」というよりは、むしろ人が風景をどのように捉えているかを意味する術語としての「景観」という用語がふさわしいと考える。なお、賢治は「景象」という語も用いており、「心象」に映じた景観を意味しているもののように興味深い。が、「景象」、「心象」、「景観」の関係については、稿を改めて論じたい。

賢治の短い人生の終焉の年、1933（昭和8）年の2月に雑誌に掲載された詩「半蔭地選定」のなかに、

いずれにしてもこのへんは
半蔭地の標本で
羊歯類などの培養には
まあまたとない条件

とあり、半蔭地にはーフシエード、条件にはコンディション、とルビが振られている。

「蔭地」は樹冠で太陽光線がかなり遮られる、いわゆる鬱蒼と茂る森林の林床を指す言葉であるが、この詩の「半蔭地」は、草原のような100%地表に光が射す立地と、手入れの悪い杉林のような林冠層が鬱閉して10%以下の光しか届かな

い立地との、中間の立地を指しているようである。シダ類もあり、昆虫や鳥もいることからみて、ここではおそらくカラマツ林の一部、時には小規模な凹地ないしは谷の、いわば「林分（スタンド）」を取り上げている。

詩の題「半蔭地選定」も典型的な「半蔭地」の林分を標本として選定してみた、いうことであるらしい。「標本」として残したいという気持ちをユーモアもこめて描いているが、1924年にこの詩の初期形「鳥がどこかでまた青白い舌を出す」には「半蔭地」も「標本」も出てこない。のち改稿するにしたがい、「この辺は半蔭地に属するために」と書き、「このへんは典型的な半蔭地で」となり、「半蔭地の標本で」と変わる。賢治の「標本」が「典型的な」ものを指す語として用いられていることが、この場合にも明らかである。

この「半蔭地選定」の初期形の一つは『春と修羅』第二集に収められるはずのものであった。この第二集もまた心象スケッチという語を冠している。心象スケッチとして、「半蔭地」の林分を「もの」に擬して、典型的「標本」と選定し、景観の中から切り取って、採集する「こと」を描いているところが興味深い。

V-2. 景観における「標本」と「論料」

詩集『春と修羅』のなかの「小岩井農場」にはこうある。

それよりもこんなせわしい心象の明滅を
つらね
すみやかなすみやかな万法流転のなかに
小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が
いかにも確かに継起するといふことが
どんなに新鮮な奇跡だろう。

つまり「せわしい心象の明滅をつらね」た「すみやかなすみやかな万法流転」のなかにありながら、その中に「いかにも確かに継起する」野原や牧場があつて「標本」となるというのである。

『春と修羅』の序で「たしかに記録されたこれ

らのけしきは」「ある程度まではみんなに共通いたします」と賢治は言う。さらに、賢治は現在「正しくうつされた筈のこれらの言葉が」「すでにやくもその組立や質を変じ」ているかのように述べ、次のように語る。

けだしわれわれがわれわれの感官や／風景や人物をかんずるやうに
そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに
記録や歴史、あるひは地史といふものも
そのいろいろの論料といつしよに／（因果の時空的制約のもとに）
われわれがかんじてゐるのに過ぎません

ここで問題となるのは、「論料」という語である。この「論料」にはデータとルビが振られている。この論料は、後述する「証拠」とほぼ同じ意味で使われている。なぜならば、このあとには次のように書かれているからである。

おそらくこれから二千年もたつたころは／それ相当のちがつた地質学が流用され
相当した証拠もまた次次過去から現出し／みんなは二千年ぐらゐ前には
青ぞらいつばいの無色な孔雀が居たとおもひ
新進の大学士たちは気圏のいちばんの上層／きらびやかな氷窒素のあたりから
すてきな化石を発掘したり／あるひは白堊期砂岩の層面に
透明な人類の巨大な足跡を／発見するかも知れません。

すなわち、「論料」とは《立論・証明の根拠となる事実》であり、それは《観察によって得られる証拠》であり、要するに《論拠とすべき材料》なのである。

前述のように、この『春と修羅』の巻頭の序詩には、我々が風景や人物を感ずるように、記録、歴史、地史なども我々が感じているに過ぎないと言う。「相当した証拠もまた次次過去から現出し」

と書かれている地質学的「証拠」は、「青ぞらいつばいの無色な孔雀」が居たことをさえ証明することがあり得るような、いわば時代とともに変わるものをいうらしい。

「心象スケッチ」における「論料」（証明するためのデータ）に類するものは、賢治のいう「証拠」である。童話「茨海小学校」の中で、キツネの小学校の存否のことについて、主人公の「私」にこう言わせている。

…狐小学校があるといつてもそれはみんな私の頭の中にあつたと云ふので決して偽ではないのです。偽でない証拠にはちゃんと私がそれを云つてゐるのです。もしみなさんがこれを聞いてその通り考へれば狐小学校はまたあなたにもあるのです。

この文は、賢治が童話「銀河鉄道の夜」の第三次稿のなかで、ブルカニロ博士に「ぼくたちのからだだつて考だつて天の川だつて汽車だつて歴史だつてたゞさう感じてゐるのなんだから」と話させていることと、相通ずるのである。

宮沢賢治にとって、「論料」や「証拠」は相対的、可変的な、不確かなものであるのに対し、「標本」は絶対的、不変的な、確かなものなのであった。

Ⅵ 賢治にとっての美しい標本 —生物の標本の場合—

ここまで「標本」として取り上げてきたものの殆どは、無機質の岩石の標本と遠い昔に生きていた化石の標本などであった。賢治はこれらの主に地学分野で扱われる標本については、作品の中で多数登場させ、しかも多彩な用い方を試みている。

それに対して、生物学分野の標本は登場することが少ない。化石とちがって、標本になる直前まで生命をもっていたものの標本を描いた作品は、あまりない。しかし、その少ない例のなかで、童話「黄いろのトマト」のなかの蜂雀と、同じく童

話「銀河鉄道の夜」のなかの蠅とは、対照的な描かれ方をしている点が興味深いので、取り上げてみよう。

童話「黄いろのトマト」のなかの蜂雀（ハチドリ）は、剥製で「美しい蜂雀」で「眼が赤くてつるつるした緑青いろの胸」を持つという。また、草稿にはさらに「立派に張られた胸」とあったが、のち「りと張った胸」と直している。その胸には「波形のうつくしい紋」もあったとしている。さきに述べたように、賢治は標本には「美しい」もの、「立派」なものが良いと考えていた。この蜂雀はそれらの条件を満たした良い標本だったのである。

童話のなかでは、蜂雀は博物館の大きなガラスの戸棚の中に四羽いるが、そのなかで「いちばん上の木の枝にとまって、羽を両方ひろげかけ、まっ青なそらにいまもとび立ちさうな」蜂雀を語り手の「私」は好きだった、という設定である。そして、この蜂雀は「私」に「銀の針の様なほそいきれいな声」で話かけるのである。しかし、なにかのはずみで、蜂雀は沈黙してしまい、「硬く死んだやうになってその眼もすっかり黒い硝子玉か何かになってしまひ」ということになる。

ハチドリの標本については、国松・薮内(1996)は賢治が「大正時代に、東京帝室博物館でハチドリの剥製に出会いすっかり魅了された」としている。しかしながら、賢治が統導した修学旅行で訪れた北海道大学の博物館や、賢治在学当時の盛岡高等農林学校には、ハチドリの標本があったので、これらの標本を賢治が見て物語に生かした可能性も高い。(賢治の北海道修学旅行でみた標本に関する詳細については、別報に記述する。)

賢治が見たハチドリの標本は、生きてるように見える剥製であつたらしく、しかも童話の中では話すこともできるのであり、時を越え、生死を越えて、美しく存在しつづけるもの、として賢治は描いたのである。

一方、童話「銀河鉄道の夜」のなかの蠅は、会話のなかに登場し、「蠅い、虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこん

なかぎがあつてそれで螫されると死ぬって先生が云ったよ。」とおそらくはジョバンニと思われる少年が言っている。言外に恐ろしく醜いサソリの標本であつたということを目わせている。

つまり、美しい蜂雀と恐ろしげな蠅という二種類の生物が、さらに、美しく造られた剥製標本と醜くアルコール漬けになっている標本という対照的な姿に描かれている。

賢治は植物を作品に数多く登場させているにもかかわらず、植物の腊葉標本については、ほとんど使用例がないのは、賢治が標本の美しさや生きているような姿を評価したことと、関わっているであろう。わずかに童話「ポラーノの広場」に「植物標本褪色調査」とか「海藻を押葉にしたり」という言及があり、腊葉標本とわかる程度で、それらについても具体的な描写はない。乾燥させ押し葉、押し花にした標本は、完全に「死んだ姿」であり、賢治には美しくは見えなかったのであろう。また、賢治にとっての良い「標本」とは美しいものであるとともに、変わらないものでもあった。色が褪せたり、脆く毀れてしまひやすい腊葉標本はその意味でも賢治が関心を寄せるものとはなりにくかつたのである。

おわりに

賢治にとって「標本」とは何であつたのか、について考察した。

賢治の描く世界には「もの」と「こと」がある。その世界のなかで美しく、立派な「もの」が、不変の価値をもつ「標本」である、と賢治は考えていた。「標本」は生死を越えて長く姿をとどめる価値をもつ「もの」中の「もの」が、「標本」なのである。

一方、「こと」は時代とともに評価や解釈が変わると賢治は考えていた。「証拠」は変わるのである。

中村(1991)は、宮沢賢治の詩を取り上げて、その特徴としての《「もの」のシネクドキー》について論じている。シネクドキーとは、一部をもって全体を、あるいは特殊をもって一般を例える

もので、提喩ともいわれる。中村は賢治が「もの」の提喩を多用することに注目しているのである。

筆者らは、「もの」のなかでも特に「標本」を、賢治は提喩に用いている、と考えている。賢治の「もの」へのこだわりは、「もの」そのものの典型を「標本」として、「こと」をあらわす心象スケッチにおいては「もの」の提喩として、示されるのである。

宮沢賢治の「標本」は、自然科学における用例のうち、展示用、教材用の「見せる標本」のみを指しており、研究者がより重要と考える《研究の材料、研究の保証となる証拠としての標本》を含んではいなかった。

後者については、賢治は標本と呼ばず、「証拠」や「論料」と書いている。しかしながら賢治は、自身の自然科学的な研究の「証拠」を採集することはなく、彼の「論料」はもっぱら心象の記録と解明（賢治はこれを一種の心理学的な研究と考えていた）のためのものであった。

一方、賢治の「標本」は、自然科学における通常の用例を超えたものも含まれる。それは景観のなかに「標本」を見いだしていることである。

標本的景観は、美的、様式的、模式的な景観でありながら、現実の動的な生命感溢れる世界でもあった。賢治の作品世界が持っている重要な意義の一つは、現在、急速に失われつつある、あるいは失ってしまった、本来の環境ないしは景観の残すべき姿を、カプセルに収めたような「標本」として、残してくれたことであろう。

作品における「標本」や「証拠」の用例をみるかぎり、賢治は、彼自身がそう呼ばれたらと思っていたという「サイエンティスト」とは評し難く、「ナチュラルリスト」と呼ぶべき存在なのであり、むしろ「コレクター」とか「ディレッタント」と言う方さえできる。

「ナチュラルリスト」は現在では自然愛好家を呼ぶことが多いが、かつては博物学者を指す言葉であった。賢治の時代は、なお博物学と博物学者の時代であり、賢治に多くの影響を与えた人物に、当時、岩手を代表する博物学者であった前述の鳥

羽源蔵がいる。彼は貝類の分類学者であり、膨大な標本収集家でもあった。

イギリス海岸のクルミ化石の件では、標本コレクター宮沢賢治と地質学者早坂一郎の仲介者として、博物学者鳥羽源蔵がいた、ということは象徴的である。賢治にとって、「こと」subjectを扱う早坂は、遠い存在であり、「もの」objectをあつかう博物学者鳥羽は、最も身近で、最も敬愛する科学者だったのではないだろうか。しかし博物学者は、「もの」を分類し、新種を発見する、などという「こと」subjectも行うが、賢治はその域には遠かった。

博物学者になりえなかった賢治を、標本を愛好する「コレクター」とか「ディレッタント」などと呼ぶことは、賢治を矮小化することにはならないであろう。なぜなら科学的、研究者的ものさしを超え、美しい「もの」objectを捉える賢治のスケールこそ、賢治の作品の骨格をかたちづかったと言えるからである。

これまで賢治に関心を寄せた自然科学者の多くが、賢治を立派な科学者・研究者と評したいあまりに、逆に賢治作品のこの本質を見失うことも多かっただと思われる。筆者らはこの小論を、自然科学の眼で、賢治作品の実像を見つめ直す作業の第一歩としたい、と考えている。

付記 本論文は、平成15年度岩手県学術研究振興財団研究助成による「自然地理・生態学的手法による賢治作品の分析とその環境教育への適用に関する研究」（代表者米地文夫）の成果の一部である。本稿作成にあたり、陸前高田市「海と貝のミュージアム」戸羽親雄名誉館長ならびに同館の方々からご教示をいただき、査読者の方々からも適切なお助言を賜った。記して謝意を表す。

文 献

- 秋枝美保 (1996) : 宮沢賢治 北方への志向. 朝文社.
- 天沢退二郎 (1976) : 《宮沢賢治》論. 筑摩書房.
- 井上克弘 (1992) : 石っこ賢さんと盛岡高等農林-偉大な風景画家 宮沢賢治-. 地方公論社. 盛岡.
- 金子民雄 (1974) : 葛丸川幻想. 小沢俊郎編 : 賢治地理. 44-57. 學藝書林. 初出, アルプ
- 国松俊英・藪内正幸 (1996) 宮沢賢治 鳥の世界. 小学館.
- 子安宣邦 (1996) : 近代ファンタジーの成立の条件-賢治論のために. 現代詩手帖. 39- 11. 66-75.
- 澤口勝弥 (2003) : 宮沢賢治と鳥羽源蔵先生. 陸前高田市博物館紀要. 8. 32. (鳥羽彊報文 資料. 初出, 杜陵高等学校同窓会会報. 12. 1997.)
- 田中末男 (2003) : 宮沢賢治 〈心象〉の現象学. 洋々社.
- 鳥羽 彊 (2003) : 鳥羽源蔵 (三枝) について. 陸前高田市博物館紀要. 8. 19-33.
- 萩原昌好 (2000) : 宮沢賢治 「銀河鉄道」 への旅. 河出書房新社.
- 早坂一郎 (1975) : 宮沢賢治との出会い. 小沢俊郎編 : 賢治地理. 98-105. 學藝書林.
- 平岡敏夫 (1988) : 「グスコブドリの伝記」と「気のいい火山弾」. 宮沢賢治. 8. 30-42.
- 中村三春 (1991) : 〈統合〉のレトリックを読む-修辭学的様式論の試み-. 安藤恭子編 (1998) : 宮沢賢治. 168-163. 若草書房. 初出, 日本近代文学
- 松浦啓一 (2003) : 自然史標本の収集と管理の指針. 国立科学博物館編 : 標本学 自然史標本の収集と管理. 東海大学出版会. 3-7.
- 三浦修・米地文夫 (1999) : 宮沢賢治の作品にみられる植物と植物園-総合的学習を目的とした大学植物園の活用について-. 岩手大学教育学部研究年報. 59-2. 131-144.
- 見田宗介 (1991) : 宮沢賢治 存在の祭りの中へ. 岩波書店.
- 宮城一男 (1975) : 農民の地学者 宮沢賢治. 築地書館.
- 宮城一男 (1983) : 宮沢賢治と自然. 玉川大学出版部.
- 横山一己・満岡孝・堤之恭 (2003) : 岩石. 国立科学博物館編 : 標本学 自然史標本の収集と管理. 東海大学出版会. 231-234.
- 米地文夫 (1966) : 宮沢賢治の短編「毒蛾」はいつ、なにを主題に書かれたか. 宮沢賢治学会イーハトヴセンター会報. 12. 13-15.

(2003年12月19日原稿提出)

(2004年2月17日受理)

“Hyohon” (Sample) and “Shoko” (Evidence) in the Works of Kenji Miyazawa

Fumio YONECHI, Osamu MIURA and Akira HIRATSUKA

Abstract This paper reviews the terms “hyohon” and “shoko”, that often appear in the works of Kenji Miyazawa, from the viewpoint of natural science. The definition of nature lover and teacher Kenji Miyazawa's “hyohon” was that it is a “sample”, as an “object” to be shown for display and educational purposes. He was not a researcher by nature, and his definition did not include “specimen as evidence that offers materials to study and substantiates research”, which is taken as something very important by researchers. Researchers use “hyohon (specimen)” as scientific evidence (voucher) to explain a certain subject. Kenji, however, did not call them “hyohon”, but used “shoko (evidence)” in his writings. Since he was a kind of agnostic, he considered that the image of a world described by “evidence” offered by scholars would change with the times.

Key words Kenji Miyazawa, sample or specimen, evidence, materials for educational purposes